



小説 洪水の後

永代美知代

一

『口説きなんすなく、お爺、今度の事ア世間一帯ぢやてなあもし、諦めなんせよ』
手傳ひに來た藤屋の亭主は、仔細らしく首を振つて、舅のお爺をなだめかゝつた。門の前に敷きつらねた蔭の上に、大きな蓆囊を持ち出したお爺は、流石にヨチヨチよろめきながら、息を切らしたが、昔から押し通して來た利かぬ氣性を見せて、今一息と蓆囊を傾げる

婦人評書

洪水

と、直ぐ又四つ這ひになつて、濡れそぼけた小麥を乾し廣げて行くのであつた。

『さうよ災難ぢや、俺もそげん事う口説いちよるもんで無え、ぢやけんどのう助、聞けい、洪水が引いてから今日で三日にならうが、それぢやに、納屋に行つて見りや大豆が芽う切つちよる、此小麥ぢやちてからが、駄舎の隅い打つ轉いたまんま、俺が先立つて出す迄干さうともし居らんぢや、味噌樽ア青かびが煮えちよるし、隠居家に行つて見りや、俺の布子も絆天も、引出に入つたまんまぢや、箆筒う早う開けとかんもんぢやけん、取り出して干さうやうも無え事になつちよる、俺はもう業が煮えてどんなんぢや』
『尤もぢや〜』

『みいや、およしア何處に居る？ 建う持つて來う云てのう、早う母さんと呼んで來うぞ』

不機嫌なお爺の容子にハラハラして居た縁が、お下髪のを散らして家の中へ駆け込ひと、勝手口の方から蒼い顔をしたおよしが、のろくさ歩いて來た。

の後

二三

「蓮うもつと出さんかい」

「蓮アもう無えのぢやがのうもし」

「お爺の眼は白く光つた。」

「何ぢや云ふ？ 百枚揃えて渡してやつたの、たつた去年の暮の事で無えか、半年やそこいらで十枚二十枚に減らす云ふがあるか、ちやんと詮索うして出しんされ」

「藤屋いも行つちよる筈のう兄さ、春の麥秋にお國姉が十枚持つて行かんしたけん」

「ほんにあれから返へさつたかのう」

藤屋の亭主はするい眼付でお爺を見ながら、鉢巻の手拭をとつて、母屋と隠居家との間の往來に、枝を張つて繁つた柿の木蔭に汗を入れた。

「今年ア柿も少なからうわい、何しろ此間の暴風で、大抵落ち盡したけんのう」

「藤屋い十枚と、それから？」

「お爺は何處迄も詮議立てをせんで置かぬらしい。およしは途方に暮れた。」

「可いわい、およし、お前も黙つて寝ちよれてや」

「およしは藤屋の亭主に連れられて家へ入つた。」

「あゝあほんの一寸との間に甚い違ひぢや、俺が婆さんと氣う揃えて働いだ時分の狀ア無え」

疲れ切つてお爺はぐつたり、隠居家の縁框に腰を下した。煙草入れを抜いて煙管を出したが、口へ持つて行かうても無く、じつと正面の母屋を睨むやうに見据ゑた。

明治郵便局と横に大書された、木目の綺麗な檜の額が、八月の烈しい日光を照り返して、軒端に麗々と輝いた。これは去年逓信大臣が此の地方を巡廻された時分、書いて貰つたものである。やれ爲替係だ、切手係だ、貯金係だ、一々出窓を切つて、局の方の普請までし直したのだが、三月と経ないうちに、息子の子貞は警察へ引張られた。口癖を生して、羽織袴を着流した局長様とも云はれる者が、まさかと信じて居たお爺は、賭博をした廉で懲役と聞いた時には、心から呆れもした。情けない思ひもした。役はとりあげられる、

「お繁伯母んの處いも行つちよらうし、安田屋からまんた戻つちよるまいけん——」

「もう可いわい、馬鹿者奴が！ 家中の家得う村中へ振り撒くが可いぞ。万と纏つた財産を譲り受けて、立派な家屋敷まで建て、貰ふて、瞬く間に左前にした亭主が亭主なら、家う預る女房も女房ぢや、寝ろく、目障りぢや、年が年中着い面アしやがつてからに！」

「私ぢやちて、たまにや寝もせうぞい、駄馬の如引叩かれ通しぢやけん、のうもし兄さ」

「寝るにも時があるわい、洪水の後始末もせんで、植松中探して見さんせ、何處に水に浸いた疊も上げんて置く家がある？ 氣の張りの無えにも何も、米虫奴が！」

「さうお爺のやうに口八釜しい事ばつか云ふのも、よし惡しぢや、お客衆はある、無人なり、およしも手が廻らんけん、些少ア堪へさつせい」

「誰がお客う引受けたんぢや？」

「お爺に相談した事で無えか、米の代丈けでも働がうと思やこそ、私ぢやちて忙しい思ひもするんぢや」

今迄隠してあつた山程の借金が見はれて来る——

「お爺は思はずその眼に涙をにじませた。だが直ぐ氣を代へて、ついと手を延ばすと、筆筒と並んで置かれた古風な桐の本箱から、濡れてぐたぐたになつた書物を取り出した。表紙のひくれた淨瑠璃本もある。部厚な性線本もあつた。一つ一つ展げて日向に干したが、中から大文字の習字帖が出て来ると、お爺は何時までも／＼手に執つて見た。地紙を蟲が切つて、加之に洪水で甚い穢點だらけになつては居るが、達者な筆跡で認められた。」

「丘、岡本、小田、尾上——」

「お爺は口に出して人名頭を読み上げた。」

「お爺、暑からうがい、何しちよるんぢや」

「單衣物の肌を脱いで、肩の方丈け晒の襦袢と一つになつたお繁伯母が、手桶を擔いで水汲みに来た。」

「まんだに水が濁つちよるがい」

井戸を覗いた儘引返して、お爺の傍の縁側を前垂ではたいて掛けた。

「皆なあの衆の本かのし」

「何が！ 悉な俺がのぢや、お客衆の物ア、其處い洪水が出さうぢや云ふ直ぐ、俺が手傳ふて母屋い運んで、彼方い移つて貰ふたんぢやけん、濡れる筈が無えかのし」

「さうかのし、ぢやけん、旦那の船の羽織う、丸洗ひにして干しとつたがや」

「そげん譯々無えんぢやに！」

お爺が首を振ると、お繁伯母は又本の方へ眼をやつた。

「大層と本を濡いてからに、勿體ないもんぢやのし」

「さうよのう、ぢや云てから、こげん物にまで掛り合ふもまれんかの、何云てもあの洪水ぢやてのう」

「ぼんの僅かの間に、どつと來たてのうし」

「六十年以來ぢや！」

水色琥珀の洋傘を翳して、母屋の門を出かゝつた美佐子は、極りの惡さうな容子をして引込んだ。

「あんな本でもお爺さんの身になると、大事なんだわ」
狩生の家には、昔からの古い本が澤山あると云ふお

いもまつてからに、そげんつまらん事ア役立ずの婆共ものする事ぢや、のうみいや、お前達母子で俺が首い袋掛ける積ぢやらうが、この野良の忙し時に、錢にもならん仕事にばつか掛り合ふてからに、やれ飯を焚くわの何の云て、暇ばつか欠き居る、お前達が寄つてたかつて、狩生の家を倒すんぢや」

「お爺！」

疳ばつた聲でおよしは呼び掛けた。向ふ座の板間に坐つて、悲しさうな縁と、つんぼの大伯母が蠶の坐代へをして居る傍で、およしは尻端折りの筒袖着て、何やら頻りにゴラクサ働いて居たのであつた。

「お爺、私を惡う云はんすのなら、何ぼでも云はんせぢやが、旅の衆に障るやうな事ア云ふて下んすな、あの衆ぢやちて、相當な事アしちよつてのぢや、錢にならん、云はんすが、私ぢや云て引き合はん事うするもんで無え」

「馬鹿者奴が！ 誰が何時あの衆の事う云ふた？ 年が年中頭が痛い、尻が痛い云てからに、役にも立たん癖に

爺の話につられて、良人の雅男と一緒にせびるやうにして倉から出させたのは、洪水のつい二三日前であつた。

二

何だか知らない騒々しいので眼が覺めた。美佐子が寢亂れ髪をかき上げながら、襖の代りに吊されたすだれ越しに、表の方を覗いて居ると、寢坊の雅男も薄眼を開いた。

遠慮して二三枚繰られた雨戸から、座敷の畳の上迄、朝日が差し込んで居る。

「何だ一體？ 八釜しくつて眠れやしない！」

怖ろしく不機嫌だ。鼻の周圍に油汗を浸染せた、暑さうな寝姿を見た丈けて、美佐子は自分迄息が塞るやうに思つた。

「みいや、よせ云たら止さんかい！」

噛みつくやうにお爺が怒鳴つた。

「錢にもならんそればつかの蟹さんに、朝から晩迄つ

しやがつて、ズベラズベラあの衆の眞似ばつかしたがるて無えか、俺はそれう云ふちよるんぢやわい」

「私がなまけ者か如何か、誰にても聞いて見て下んせ、十六の年に嫁入つて來てから以來、毎日日日、お爺、私アお前に引き廻された。働さづめて此年になりア、些少やそつと病痛も出來うぞ、植松中探したちて、とても事私う置いてお前の相手て働ける女御があらうかい、私ア伯父姪の仲なりやこそ辛抱したんぢや、お前のやうな難しい舅が他人なら、とうの昔に出とつた！」

「俺も姪ならこそ堪へて置いたんぢや、亭主の番一つようせんで、錢は費はす、牢へは入れる。氣に入らんにや何時でも出て行け」

「お爺、そげん事ア云はんもんぞい、皆な手前の恥で無えか、育て方が惡けりやこそ、馬鹿息子も出來たんぢや、私ア着物を賣つても、お前を一生食せる位な事アすけん、八釜しう云はんで見ちよつて下んせ」
「見ちよつて如何なる？ 家中の着物を賣つた云て、何

「ほ程の錢になる？馬鹿者奴が！錢勘定も出来ん女ぢや、お前が出て行かんじや、俺が出てやるわい」

お爺の權幕は愈々烈しくなつて来るばかりである。美佐子は聞き兼ねて顔を出した。

「まあ、お爺さん、私達が居て悪けりや、何とかしませう、どうぞもう怒らないで下さい」

「いや、俺さん、俺アあなた方に怒つて居るで無え」

まるで別人のやうな穩かな調子で云つたが、直ぐ又、

「如何ぢやあやし、お前が出るか、俺が出ようか」

其處へ藤屋の亭主が駆けつけた。お爺の傍に立つて

オドオドして居る美佐子を見ると、一寸と會釋した。

「お爺、如何したもんぢや、なあもし、お客衆に悪いぢやないか」

「よし！俺が出る、人好ばつか残つて、狩生の家アやんがて倒れるんぢや」

「お爺！」

あやしが何か云はうとすると、藤屋の亭主は傍へ寄つて押し靜めた。

したのにねえ」

斯う云つて唇を噛んだ。

「奥さん、そりや他に譯があるんぢやけん」

あやしは周章で、云ひ譯をした。

「何のこれ程廣い家に居つてからに、寢場が無いの何の、私等ア淋しいがのうみいや」

縁は何とも返事をしないで、悄氣切つた、力の無い容子をして、母親に寄り添ふて居る。無邪氣な一人兒らしい係は、何時の間にか見る事も出来なくなつた。

「オイオイ」

雅男が起きて出た。手拭をぶら下げて彼方の縁側に立つて、向ふむきになつたまゝ呼んで居るのである。

「お洗面？」

「郵便局へ行つて、小澤君に訊いて來給へ、山川からまだ何も來てないかつて！」

「えい」

「えいぢやないよ早く！馬鹿々々しい、僕等ア厄介者ぢや無いんだからね」

「まあ何も云ふなてや、お前が口答うするけん事が難しうなる」

「何も云ふ事ア無え、此處の家ア皆なて倒したんぢや、貞さんも費ふたらう、私も役立ずぢや、お爺は働さ者ぢやが、小言ばつか云ふて、家中の氣う腐らせなんした」

「云ふなてやあやし！」

「云へ、云へ、小言云ひの俺が出たら文句はなからうけん、狩生の家が元通り立派に立て直して見さんせ」云ひ捨て、お爺はついと出た。門口に立つて居たお繁伯母が、それを無理矢理すかすやうにして、自分の家へ連れ込んだ。藤屋の亭主は向ふ座の上り框にとつかり腰を据えて、煙草をふかし初めた。

「お爺の癖ですけん、あなた方に如何の斯うのと、そげん氣持ちがある譯ぢやありませんけん、なあもし」なめつけたやうな藤屋の亭主の言葉を聞いて居る間も、美佐子は忌々しい氣がして堪らない。

「寢場が無い／＼つて仰有つてた事も、よく知つてま

「だつて來たら小澤さんだつて、直ぐ屈けて呉れるてせう、もう何度も／＼訊くんですもの」

「よろしい、僕が行く！」

睨むやうな險しい眼付をして雅男が怒鳴ると、美佐子もプリプリア腹を立てた。庭へ下りて足高の手洗盥に水を汲んで差し出すと、パイと寢床を片附けに立つた。

金さへあつたら、何も云ふ事は無いのだが、二人は丁度使ひ切らして、東京からの送金を持つ間の今の手許には、とても移轉の出来る餘裕は無いのであつた。

三

眼の眩む程烈しい日光を浴びて、夫婦はわざ／＼郵便局へ出掛けたが、生憎小澤事務員は居なかつた。弟の收二が一人留守居をしながら、勝手元で大きな唐茄子を切つて居た。

「何處でお買ひなすつて？」

「佐伯の町で買ふたのです、何なら半分わけてあげませうか」

「え、だつて」

美佐子は洪水以来、村には碌な野菜がないので困つて居た。泥まみれになつて、煮ても焼いても、あくつぽくて食べられぬやうな茄子を手に入れるのにさへ、散々頭を下げて、百姓家を頼み廻らねばならなかつた。辛との思ひで賣つて貰つた唐茄子は、洪水に浸つて居たせいかわれどもこれもガザガザして些少も甘くない。食物に入釜しい雅男は、とてもあよしの裏で出す惣菜では、我慢がし切れなかつた。

「讀つて貰つたら好いだらう」

「だつて小澤さんだつて、わざ／＼佐伯からお買ひなすつたんですもの」

「いゝえ、何ぼでも佐伯い便があるんです、郵便脚夫に頼んで、私方では又買ふて來させますけん」

「さう、ぢや讀つて頂きますよ」

美佐子が風呂敷を借りて包んで居ると、丁度其處へ脚夫が行囊を持ち込んだ。

神經質な雅男は、收二が消印を押した一つ一つを見

貫入積りだつたんだよ」

「さうなのよ、だけども誰がねえ——」
美佐子は屹驚して、そつと雅男の袖を引張つた。

「お爺だね」

「何處へ行くんでせう？」

藤屋の隣りの煙草屋から出たお爺は、白木綿の風呂敷包を背負つて、毛襦子の蝙蝠傘を握つたまゝ、一寸と此方を見ると、周章てたやうに二人へ脊を向けて、反對の方角を差してスタスタ歩いた。

「兎に角變り者だよ、一寸と書けるねえ」

「あなた東京へ歸つたら直ぐお書きなさいな」

「あゝ、面白い短篇だねえ」

斯う話して來ると、二人は次第に不快な念が薄らいだ。もう朝からの不平も何も無い。別府からふと此村へ來て、狩生のやうなあゝした家に泊り合はせた事も、面白いやうな氣がするのであつた。

「もつと散歩して見るか」

曲り角まで來て、雅男は美佐子に斯う云つた。美佐子が考へて居ると、彼方から緑が手を叩いて走つて來た。「もう家い歸らんのか思ふて、私も母さんも氣う揉んだぞな、歸つて來て嬉れしい！」

入つて居たが、東京からの郵便物は一つも無かつた。二人は悄氣切つた。

「ぢや失敬、僕等にあてた郵便物が來たら、特別に直ぐ頼みますよ」

「私が持つて行きませう」

「どうぞ？」

局の門口を出ると直ぐ、雅男は美佐子を顧みた。

「今日中に來るだらうかねえ」

「來ないものは如何しようも無いわ、來る迄待つてらつしやい、今に來ますよ」

「洪水で如何かなつたんぢやあるまいか」

「あなたも餘程神經質ね、今金が來たつて、移轉す家も無くて、如何もならないぢやありませんか」

「又別府へても引返へすよ」

「ふ、ふ！」

「全くさうした方が氣が利いてるぜ、あんな慾ばり爺つてあるもんぢやない、彼奴僕等が東京者で、別府から來たつて云ふもんだから、家賃から何から別府並に

「みいちゃん、お爺さんはあれから歸つて？」

「いゝえ」

「先刻ね、風呂敷包を背負つて、佐伯の方へ行つたことよ」

「大方元田の親類へ行つたんぢやらう、お爺はな、何時でも逃げさへすると元田で三晩も四晩も泊つて來るん」

「ねえみいちゃん、お爺さんは蜂のやうだねえ」

「如何して？」

「氣に入らないと直ぐ逃げるからさ」

「それは笑つた。」

それは丁度洪水の二日ばかり前の午後であつた。隠居家の座敷に寝そべつて、雅男夫婦が雑誌を讀みながら、うと／＼してゐると、緑があわたしい聲で表から呼び立てた。

「蜜蜂が出た、蜜蜂が」

「え？」

驚ろいて美佐子は飛び起きた。お爺は尺魔山の椎茸山に、あよしは野良仕事に、皆なで出た後で、母屋には緑一人が留守居をして居たのである。緑について母屋の庭に廻つた美佐子は呆れて了つた。如何手をつけ

たものか解らない。早速雅男を迎えて来させたが、雅男も斯うした場合に施すべき手段を知らなかつた。箱の外に赤く圓く塊つて、グイン、グイン凄じい羽音を立て、唸る密蜂を、たゞ見詰めて立つた。

「水う掛けて見らん」

縁が思ひ出したと云つて、駄舎傍の物置から汲上げポンプを持ち出したので、雅男も面白がつて手傳つた。塊を眼掛けて、ぐん／＼水を注ぐと、蜂は怒つて飛んで行く。

「どうしたんだ、皆な逃げ出すぜ」

「何時でもお爺は斯うするん。ほこから、皆な逃げて了ふて、何處ぞの木いとまつちよるのを、後からとりに行くんぞな」

「お爺さんに叱れても知らないよ」

密蜂は一匹残らずたつて行つた。やがてお醫者の庭の柿の木にとまつて居るのを見つけると、縁はおよしと二、三度、袋を持つて迎えに行つたが、密蜂は又、何處か東の方をさして飛んで行つたさう、行衛が知れなくなつた。

その日の夕方、お爺が行水を使つて、隠居家の縁側に腰を掛けた時、美佐子がその話をすると、定めし不

機嫌だらうと思つたお爺は、案外平氣であつた。たゞ低い聲で斯う云つた。

「何事がお氣に障りましたやら？」

そしてその言葉尻をさわりのやうに、節をつけたものである。美佐子は今でもその時のお爺の顔が目についた。齒の無い口元をへの字に歪めて、灰色の睫毛の眼を細めて、首を振つて、そして美佐子の方を見てニヤリと笑つた。

「お歸りなさんし」

隠居家の前で、泥水に浸つた畳を、ボクボク叩いて居たおよしが聲をかけた。

「母さん、お爺は又逃げたんぞな、奥さんが見たさうな、元田ぢやらうかのう」

「逃げたや！三三日は歸るまいよ」

「およしはホツとした。」

「みいや、お花姉の處に行つて、砂糖を一斤買ふて来なんせ」

「母さん干甘藷粉だんごを作へるん？」

「奥さん達と、お茶でも一緒に飲まんと思ふて——」

縁は小さな茄子齒を見せて微笑んだ、そして直ぐ駆け出した。